

△遊行柳▽の世界

三宅晶子

△遊行柳▽の曲舞は、舟の起源・玄宗華清宮の柳・清水寺縁起・蹴鞠・女三の宮への柏の恋等を連ねた、柳尺である。一曲の中心をなすべき曲舞に内容の一貫性がないため、「部分の動きの面白さを楽しむ風流能的」(若波日本古典大系『謡曲集下』解題)との評価を受ける原因を作っている。特に蹴鞠の縁から『源氏物語』へと続く(「クセ」後半は、柳とも無関係で、気になる部分である。なぜここに『源氏物語』が引かれねばならぬのか。詞章だけ読むとそういう疑問が湧く。ところが能として観た場合、一見バラバラな素材の集まりが、思わぬ効果を生んでいる。稚拙とも見える素材処理が、「風流能的」魅力に及ぼす影響は何であろう。風流能的作法における詞章の役割、その辺について考えてみたい。

世阿弥は本説のない能を作り能と呼ぶ。個性のない草木の精をシテとする精物は、一見作り能的であるが、実は西行の詠んだ歌に出てくる桜(西行桜)、高子后である杜若(杜若)、女に化けた芭蕉(芭蕉)等、特別の説話に登場する草木を使っており、その説話が核となつて能が構成されているから、純粹な作り能ではない。又その詞章は、本説やシテの人体に因んだ多くの語句が、一〜五語程度の単位で集められている。例えば△高砂▽の(「クセ」色はなほ、真折の葛永き世の、譬へなりける常磐木の、中にも名は高砂の、末代等、高砂・住吉の松に関連する言葉ぞ、縁語・掛ケ詞等の文節によつて、祝言的内容に統一している。△西行桜▽の(「クセ」では「松吹く風の音羽山、ここはまた嵐山」等、常に言葉の関連によつて、桜の名所が詠い込まれていき、全体では花盛りの美しい都の春が写し出される。禪竹の△杜若▽は、業平の一代記を、折々に詠まれた歌を読み込みつつ語る。

このような既成の精物の素材処理法に対し、△遊行柳▽は、西行の詠んだ「道のべに清水流るる柳蔭暫しとてこそ立ちどまりつれ」の柳ではあるが、この歌とは無関係な故事や物語が、平明な説明的文句で長々と語られるため、結局この歌は精の登場の契機としての役割しか果たしていない。同じプロットの△西行桜▽が、現在能的構成と眼前の春の景を謡う曲舞によつて、西行の歌の世界から離れぬ工夫をしているのは、曲の狙いが異なるのではなからうか。△遊行柳▽の中の各物語は観察者の立場から第三者的に語られているようである。西行の見た川辺の柳・遊行上人の通つた柳・舟の起源となつた柳云々。様々なできごとを、常に脇で観ていた観察者である柳は、それぞれ別の柳であるはずだが、シテの精は個を超越した存在として、長い時の流れを経て、今は朽ち木の姿を仮りている。個々の物語は独立した異次元の世界として描き出され、観客の前に次々と替絵の如く展開する。特に『源氏物語』若菜上巻を引く

柳桜をこさ交せて……小簾の隙、漏り来る風の匂ひより、手飼ひの虎の引き綱も、長き思ひに檣の葉の、その柏木の……

は、単に柳の連想にしては離れすぎ、長すぎる部分である。ところが柳尺しのはずという先入観を除いてみると、この部分は王朝の雅びの世界をリアルな実在感を伴って展開するのである。小簾の隙から漏れる香の匂い、美しい襲の色、ひき綱の仔猫等、具体的イメージを与える平易な描写は、それぞれ写実的動

作によっていっそう現実感が与えられ、別世界を覗きからくりのように垣間見せる。

この手法は、同じ信光作の〈胡蝶〉にもある。『梅花に縁なきことを嘆く胡蝶』が核となる素材であるが、その中に『源氏物語』胡蝶巻が組み込まれ、紫上と秋好中宮の贈答歌に登場する胡蝶等を、同じ胡蝶の如く用いている。どこにでもいるという蝶々の特質を活用して、胡蝶という素材に具体的イメージを与えるため、本説ではない『源氏物語』を利用してののである(高倉由紀氏「能の中の源氏物語」『めじろ』11号)。それはどこにでも生えている柳と同じ特質である。核となる説話的背景が希薄なだけに、作り能として自由にイメージを拡大できる。本説であるか否かは重要でない。一方、〈老松・高砂・阿古屋松・杜若〉等が本説を物語り、〈西行桜〉が眼前の景色を描写し、〈芭蕉〉が無常を語る等、既成の精物の人物造型の方法は、人間をシテとする曲同様に、個としての存在を明確に意識し、本説を重視するのである。

ところで世阿弥は、精物の能を祝言色濃厚な神能として作る点に特色がある。神能ではない〈西行桜〉も、シテは神格化されており、奇瑞の歌舞を舞うのである。禪竹は無常観の象徴としての〈芭蕉〉や、高子后¹¹杜若の精が業平に移り舞する〈杜若〉等、世阿弥とは別

の精物を作っているが、〈遊行柳〉も、朽ち木の柳は、朽ちていることが、老とはちがって祝言にはならない。華やかさも期待できぬ。むしろ松や桜の祝言性とは逆に、無常と哀愁のイメージであろう。上人の十念を受けて成仏するため出現する精は、成仏できないで無常の世に朽ち木として留まっている。故にこの曲において朽ち木であることの意味は大きいのである。2段「上ゲ哥」

昔を残す古塚に、朽ち木の柳枝寂びて、藤踏む道は末もなく、風のみ渡る気色かなは、新古今の「打ちなびき春は来にけり青柳の藤踏む道に人の休らふ」を転用して、青柳ではなくなった朽ち木では、影に休らう人もいなければ、道もない、ただ風だけが常に変わらず吹き渡るといふ、印象的な表現を作り出している。その長い時間を経た柳の体験的回想として、様々な事柄が紹介される。様々なできごと、いつも脇にあった柳、無常の世に常に存在した柳である。

このような核となる説話や内容の統一性を必要としない能作法は、世阿弥の〈松風〉のように、詞章操作によって本説が存在するかの如き物語的背景を作り出す方法とは異なる。詞章に対して、統一性を必要としない新しい感覚を持った作者故に作り出した、作り能である。

(目白学園女子短期大学専任講師)